



For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

加藤延雄・久永省一共著

『新島襄と同志社教会』

(同朋舎出版事業部 発行一九八六年九月
B6版・三〇五頁 二、〇〇〇円)

加藤延雄・久永省一共著『新島襄と同志社教会』は昨年九月刊行された。これは同志社教会史の明治篇として加藤先生が亡くなられる(昭和五五年)二年前に書き終えられたものを、久永先生が「油袋清風日記」や「基督教新聞」、「七一雑報」などを資料に加筆され、それに同志社教会「月報」に載せられた明治篇余録をつけ加えて、今回同志社教会百年史とは切り離して刊行されたものである。内容は原史料として「第二公会録事」と「同志社教会日誌第一部」第五部」を用い、史料の欠けている

部分を傍系資料で補いながら、学園教会としての同志社教会の明治期をわかり易く書き上げられている。次にこの書の特徴を挙げると、(1)著者は新島襄のいう「自由教育・自治教会両者併行邦家萬歳」の具体的実践として、教育と伝道、同志社と同志社教会の密接不可離な関係を明らかにしようとしていること、(2)明治九(一八七六)年一二月、同志社教会の前身西京第二公会が設立され、明治一九(一八八六)年一月、同志社教会設立、新島が亡くなる明治二三年一月までを特に新島に焦点を当てながら詳述していること、(3)徴兵猶予の特典が与えられなくなって(明治一六年)から再び与えられるようになる(明治三三年)までの学生数の急減による経営悪化の状況、組合教会と一致教会の合併問題(明治二〇(一八八七)年)、宣教師、アメリカン・ボードとの関係悪化(明治二七年)、同志社綱領削除問題(明治三二年)、教育勸語等国家の右傾化傾向の中でのキリスト教、同志社及び同志社教会の苦悩を詳述していること、である。久永先生は同志社教会の「真の『栄光』」は、新島襄の獅子奮迅の伝

道旅行と伝道基地探索旅行、それに新島の弟子たちが、新島が築いた橋頭堡に牧師となって飛び散っていったことである。(二四八ページ)と書いている。新島は熊本バンドを始め多くの良き弟子たちをもち、彼らが新島の遺志を継承して、地上に「主之御国」を建設することに貢献した様子を、著者は描こうとしている。明治四〇年一月、原田助が第七代総長に就任し、以後同志社は飛躍的な発展をたどるが、著者は結論として、明治四五年「新島の最終目的であった同志社大学の設立が彼の死後や二二年目に実現したというのに、それがかつて同志社の本質であるキリスト教の神随から遠ざかってゆく傾向を生んだということは皮肉なことであり、学園全体が深く自戒せねばならないことであった。」(二四四ページ)という文章で締めくくっている。新島の遺言「同志社は隆なる二従ひ機械的に流るるの恐れあり、切に之を戒慎す可き事」は同志社大学設立時に対してと共に現在に対しても我々に警告として銘記すべきことを著者は我々に教えている。余録として載せられている一六篇の随想は軽快

な筆致で読者をひきつける。初期の同志社と同志社教会に関心のある者には必読の好書である。

井上勝也（文学文学部教授）

ジョナサン・スウィフト著

田中光夫訳

『スウィフト小品集』

（山口書店・発行一九八六年十一月）
（A5版・三一三頁 三、二〇〇円）

ジョナサン・スウィフトの名を聞いて大方の人々が頭に浮べるのは、あの『ガリヴァー旅行記』の作者ということではあるまいか。そして作者スウィフトの意図とは裏腹に、この代表作がはなはだ奇怪な冒険物語として読み継がれ、あるいは原作の毒を薄めたダイジェスト版が子供向きのお話として高い評価を得てきたがために、後世のスウィフト像には様々の歪みがあらわれてしまったのである。たとえば日本人の手になるスウィフト伝、スウィフト研究として最もすぐれたものと言える故中野好夫氏の『スウィフト考』にも、人間嫌いスウィフトという姿があまりに強烈に出されているがゆえに、スウィフトの実像とのズレを感

じざるを得ないというのが正直な気持ちなのである。

このたび田中光夫氏の手で訳出されたスウィフトの小品群は、従来、専門家以外にはほとんど手にとることのなかったものばかりである。田中氏自身も解説で述べられているように、スウィフトの著述活動の本領はジャーナリスティックな部分にあり、同時代の政治・社会現象について、折りに触れて敏感な反応を示してきたわけだが、そうした膨大な量の時事的文章の中には、もちろん今日の目から見て色あせたものも少なくはない。だが、そのうちにもスウィフトの祖国アイルランドとイングランドとの確執を扱った文章は、時代を越えて読み継ぐに足るべきものが数多くあり、現在のアイルランド問題の根幹にあたるテーマを扱った極めてアクチュアルな小品があることも、これまた事実なのである。そして、一七二九年に発表された「ある控え目な提案」と題する作品が、アイルランドの貧困問題という背景の前で考えてこそ、初めてあの幼児の肉を食用に売り出せという狂気とも思える提案の真意も理解できるとする

ならば、ここに訳出された作品群を読むべき理由も自ずとはつきりするだろう。

いや、それだけでは足りない。この小品集の後半に訳出されている「第二のソロモンの物語」や「ジョンソンさんの死」を読めば、人間スウィフトの私的な部分がわれわれの前にまざまざとよみがえってくるのである。そしてその姿は、必ずしも世を呪い、人間を厳しく裁断したスウィフトとは言えないものとなる。このすぐれた訳書をきっかけにして、スウィフト像の再検討が行なわれるとすれば、今後の十八世紀イギリス文学研究も新たな展開を見せるようになるかも知れない。

小林章夫（女子大学助教授）

山根 学著

『現代エジプトの発展構造——

ナセルの時代——』

（晃洋書房・発行一九八六年六月）
（A5版・三八八頁 三、八〇〇円）

本書は、一九六〇年代初頭における「アフリカの目覚め」（帝国主義の植民地体制の崩壊）と六四年の「国連貿易開発会議」の成立に象徴される「ポスト・コロニア

ル・エーデ」の形成過程において主導的世界的役割を演じた「ナセルの時代」のエジプトを、内面から、その政治・経済構造の展開を通して描きだしている。

一九五二年のエジプトの「七月革命」(ナセルに指導された自由将校団のクーデターによるファルーク王制の崩壊)は、「全アラブ圏に大衝撃を与え」モロッコ、チュニジアの独立とアルジェリアにおける民族解放闘争の高揚へと波及していった。本書の第1部「植民地支配下のエジプト」では、「七月革命」の歴史的・経済的背景が解明されている。一九五六年のスエズ運河の国有化宣言とその後のスエズ戦争を契機にエジプトにおいて展開された英仏系銀行・保険・貿易会社の国有化、「経済開発機構」の設立、工業五カ年計画の策定に次いで、一九六一年七月における全銀行・保険会社を含む主要工業・貿易会社の国有化など一連の国家主導経済発展路線への経済的基盤の形成過程において、エジプトは民間資本主導型工業化体制から「社会主義」型工業化体制へ移行する。第2部「革命下のエジプト」ではこの移行過程の経済的背

景が検討されている。

本書の核心をなす第3部『アラブ社会主義』下のエジプト』では、「ナセルの『社会主義論』、『アラブ社会主義者連合』支配体制下での経済政策の展開と破綻の過程が、刻明に分析されている。著者によればナセルは、アラブ社会エジプトに独自の文化的、社会・経済的構造によって規定され、かつそこに根差す諸階級・諸階層の諸イデオロギー、諸勢力との対抗・妥協といった政治過程の複雑な曲折と激流に揉まれながら、第2部で指摘されているような焦眉の経済的・現実的諸問題(大衆的貧困を解決する課題へと集約される)への試行錯誤的な現実的対応過程において、スエズ運河国有化以降の一連の主要産業の国有化と経済計画の策定を経済的土台・前提として、プラグマチックに「社会主義」エジプトへの移行をなし遂げた、ということである。この移行過程とナセルの「アラブ社会主義論」について、エジプトの独自性をそこに刻み込み、国際政治の流れを汲み込みながら、歴史的具体的に経済過程と政治過程の両面から刻明に分析されており、まことに

興味深い。本書は、ダイナミックにエジプトの発展構造の分析に迫った力作であり、一読を薦めたい。

西口章雄 (大学商学部教授)

越智文雄博士喜寿記念論文編集委員会

『ミルトン——詩と思想 越智

文雄博士喜寿記念論文集』

(山口書店・発行一九八六年十月)
B5版・四五五頁 三、八〇〇円)

大学教員には三つの仕事がある。教育と研究と大学経営である。越智先生と言えば、長年に亘り同志社女子大学学長の重責を果たされたこともあり、学内ではともすると、大学経営者としてのお姿をまず思い起こす者がいる。また、西洋古典語に通曉された先生の重厚な学問的業績を知る人中には、先生を孤高の学者であるかのように思い込んでいる人も多い。しかし、先生は何よりもまず秀れた教育者である。教育と言っても、単に、規定の授業を行ない、教室で学内の教え子を育てられただけではない。先生を慕って訪れる後進のミルトン研究者にも暖かい励ましと的確な忠告を分け隔てなく与えてこられたのである。今

回、先生の喜寿記念論文集を出版するとの報に、日本全国のみルトン研究の第一人者がその研究成果を引つ提げ、一堂に会したのも、先生の教育者としての地道だが幅広い活動が結実したものと云えよう。

近年の日本のみルトン研究論文集の代表的なものとしては『みルトン研究』(金星堂、昭和四十九年)及び『みルトンとその時代』(研究社、昭和四十九年)があるが、豪華な執筆陣を得た本論文集は質量共にそれらに優るとも劣らない出来映えであり、この十年間の内外のみルトン研究の進展と動向を伝えるという点では、類書を凌駕するものである。近年のみルトン研究の最大の収穫は、何と言っても、イェール大学出版の『みルトン散文全集』(全八巻)の完結である。とかく文学研究者には軽視されがちであった散文作品の完全校訂版が刊行された今、より包括的にかつ精緻な思想的視座のもとで、詩人みルトンの作品の意味を新たに問い直すことが研究者の課題となっている。本論文集がみルトン研究のこの最先端の要請に応えるべく編まれたものであることはその副題(『詩と思想』)にはっきり

と謳われている。みルトンの散文作品を直接に論じた五編の論文は言うまでもなく、彼の詩作品を考察した十五編の論文も近年の研究成果を様々な形で反映する意欲作が並んでいる。扱われている作品もみルトンの初期から最晩年に至り、この十七世紀英国を代表する詩人の輪郭とその最も知的刺激に富んだ局面が浮かび上がってくる秀れた論文集である。

学術書出版の危機が憂慮される中、充実した内容と端正な装幀を保ちながら、この価格で本論文集を世に問うまでには編集委員の方々のひとかたならぬ御苦労があったことであろう。みルトン愛好家必読の一冊である。

圓月勝博 (文学文学部専任講師)

ロジャー・B・ヘンクル著

岡野久二・小泉利久訳

『小説をどう読み解くか』

(南雲堂・発行一九八六年六月
B6版・二四三頁 二、五〇〇円)

小説の読み方は、小説を読み続けている間に自然に身につくもので、学校で教わるものではない、とする考え方が日本では未

だに残っている。だから、学生たちの読み方は我流で、印象批評的で、批評用語も正しく運用できない有様である。そもそも小説を分析的に批評する力が日本では育たないかの観がある。

このような環境の中、ブラウン大学で英文学を講ずるヘンクル教授の *Reading the Novel* を岡野久二、小泉利久両氏が『小説をどう読み解くか』と題して訳出されたのはまことに時宜にかなうものといえる。

第一章は読み方のこつを手ほどきする部分である。何をメモし、何に注意を向け、メモの再検討、解釈の準備をどのようにするかを語っていて、親切な導入部といえよう。第二章では小説の種類を社会小説、心理小説、象徴的行動の小説、近代ロマンスの小説と四種類に分類し、その例としてアップダイクの『走れウサギ』、フォークナーの『響きと怒り』、バージエスの『時計仕掛けのオレンジ』、ブロンテの『嵐ヶ丘』を挙げて分析する。種類を識別するだけでも批評・解釈に必要な疑問を整理できるとヘンクルは考える。第三章は、小説世界の特質への読者の期待、作中人物への読者の関

心と期待、伝統的なプロットへの読者の期待等の三要素が小説の構造とプロットを決定する、と説明する。一見、奇異に感ずる部分である。なぜなら、構造とかプロットとかは既に存在している筈だからである。しかし、構造とかプロットとかを読者が発見していくという視点に立てば、この説明に説得力があるのに気づく。第四章では視点を「物語中の事件を見るのに有利な地点」と定義した上で、正しい解釈に到達するには語り手の信憑性に注意が肝要と説く。語り手の情報操作に惑わされない力を養う必要性が強調される。第五章では作中人物の造型のメカニズムが人物描写の複雑性、注意の量、個性の強さによって明らかになると著者は説明する。ここでヘンケルの興味深い逆説が開陳される。ハーディは人間をよく知らなかったから作中人物は不透明で謎に満ち、深みが増す。オースティンは人間を知りすぎて「平板な」人物を立ててしまう。これではオースティンは浮かばれない。さらに、従来、作中人物は機能面から類比によって引き立て役となるフオイルと、主人公の意を体するコンフィダ

ンとに分類されているが、それらを「引き立て役」と「類比」という点から整理している。第六章は伝統的に「背景」として説明されるものを「場面」とし、それを構成場面とクライマックス場面とに分け、作中人物や小説の心象群や主題との関係で意味を明らかにする。第七章では小説が言語を媒体とする芸術であるが、言語は単なる伝達手段として働くだけでなく、感情を表現する手段でもあるから、文のリズムや統語法なども小説の意味を作るのに寄与すると説く。終章である第八章は読み解く手続きがチェックリストとしてまとめられている。

小説を分析的に読み解く方法と手順とを身につけたいと志す読者には是非本書の一説をお薦めする。本書を使って身近かな小説を読み解きたくなるのは間違いないからである。それのみか、小説を分析的に読み解ける人にも本書の一説をお薦めする。なぜなら、読み方の手順や用語について心の中で著者と語り合いたくなるからである。例えば、小説を読み解くのに第二章にある小説の種類から説き起すのが妥当である

かどうか、また、第五章の主要人物を決定するのに個性の強さが鍵だと著者は指摘しているが、これはむしろ葛藤との関係で考えなければならぬものではないか、「葛藤」や「主題」についての説明が欠落しているのではないかと。

さらに、原著はアメリカで出版されて以来、小説入門書としては定評のあるもので、手際よく訳出された本書を必要に応じて座右の書として利用するのも最適の書である。

坂本完春（大学文学部教授）

小倉襄二編

『老後保障システム論——総合

化の視点』

（世界思想社・発行一九八六年十月）
B6版・二四四頁 一、九〇〇円

テレビ番組のなかで、私が意識的に見ることを避けるもの一つに老人問題、とくに寝たきりやボケを扱ったものがある。番組での扱い方にその理由があるのでなく、なにかこうした「老人の姿」を見るのが辛ドイからである。いづれ自分自身も、ということはおわかり、いまから

こうした問題に関心を持っている必要を感じはしているのだが、やはり見るのを拒んでしまう。

小倉襄二編の『老後保障システム論』は、編者自身の論文九編を集めた「I部・老後保障システムの構成」と、京都新聞に連載された編者を含む六人の文章の「II部・二十一世紀への老人福祉」から成り立っている。「I部」は雑誌や紀要に発表された論文から構成されているので、重複や繰り返しが目につくが、冒頭に述べた私自身の老人問題についての「回避行動」を修正することを迫る契機と気迫を読み取ることができ。

「老年人口が全体の七%から一〇%に到達するまでに要した年数は、(中略)、わが国はわずか一五年、欧米の二〜三倍のほげしいテンポである」と指摘されているように、日本の高齢化は急速に進行している。ところが「老後保障とか、老人福祉について、制度の条件、現に在るシステムやサービスについての分析や解説は、情報や研究調査としても相当に蓄積されている」にもかかわらず、「一人一人の市民にとっての老

い、あるいは、老後の設計の困難さとのかわりについては、それぞれの立論がバラバラになっている」。さらに「大筋でいうと、福祉的なるものの史的推移や状況は、中央権力から放下され、地方一地域に責任や役割を押しつけられ、転嫁されてきたという経緯」をふまえて、「戦後三〇年余の社会保障、とくに社会福祉政策への徹底した反省」から出てきた『市民福祉』という考え方およびその形成ということが「I部」で熱っぽく語られている。

「老い」は個人自ら背負わなければならない宿命であり、同時に重要な社会問題であるが、「序にかえて」で述べられている「敬老の毒」の現実が消えないところに、老後保障の大きな問題がひそんでいる。編者が推奨するボーヴォワールの『老い』で展開されている思想、言い換えれば、一人一人が、いかに「老い」を思想化するかという問いの大切さが本書をとおして読者に伝わってくる。「I部」とびらの引用文からうかがえるように「システム論」は「思想論」であるわけだ。

北村日出夫（文学文学部教授）

川島寛治著

句集『雪嶺』

（自家版・発行一九八六年十二月）
（B六版・二一七頁、二、〇〇〇円）

句集『雪嶺』は、同志社女子中学・高等学校教諭、俳誌『向日葵』同人・川島寛治氏の第一句集である。

著者の俳歴は、昭和三十二年にはじまり、馬酔木同人那須乙郎に師事、「馬酔木」「向日葵」の作り手として活躍している。

山陰の豪雪地で育ち、幾年も厳しい冬山に挑み、雪嶺を竹や素木を材料にして自分で作ったスキーで滑降していたという氏は、山岳俳句を最も得意とする。

十四章に分けた句集の大半が山岳俳句で占められている。

黒百合の露まろび落つ夜明前
山毛櫛の芽のひかりに遠し月の湖
天に音なし雲中に咲く座禪草
夕星や霧噴きあぐる氷河跡
ホップ刈る野に遠澄める八ヶ岳
榎明り土間に立て置く救護櫓
氷壁にいとむ風かも闇に鳴る
雪嶺を見し浄さまで年越さむ

これらの句は、山の自然を愛する眼と、
厳しさを凝視する鋭い眼が、山の大自然か
ら抒情的写生の手法で截りとった佳品とい
えるものである。こうした山岳俳句の他に
本業の教職を題材にとった次の句には、教
え子に対する愛情、暖かい眼ざしが感じら
れる。

長欠の子の空席に冬日射す

遅れ来て言葉すくなき夜学生

夏空へ諸手突きあげ試験果つ

大試験課す身には課す身の愁ひ

女子寮に讚美歌あふる卒業期

杜若雨の女子寮歌に充つ

又、人間愛の発露ともいふべき次の作品
を読むと心を締めつけられる思いもする。

盲導鈴野分にときれ島暮るる

帰るすべなき病負ふいわし雲

法師蟬狂ひ鳴く夜の隔離島

癩の身を灼きて拓ける島の畑

島に墓地なし故郷なし雁わたる

晚禱の静けさに鳴く法師蟬

同志社女子中学・高等学校教諭としての

川島保先生は、まもなく定年を迎えられる
が、俳句仲間としての川島寛治氏に定年は

ない。

先生のますますの健勝を祈り、山岳俳句
を志す人、山の自然に関心を持たれる人に
ぜひお読みになることをおすすめして筆を
擱く。

三木蒼生（俳人協会会員 俳誌「向日葵」同人）

正木久司著

『株式会社論』

（晃洋書房・発行一九八六年十一月）
（A5版・二九三頁 二、八〇〇円）

現在わが国では「大小会社区分立法」と
称される商法改正作業が進められている。
これは、株式会社法が本来規制の対象とし
ている会社と現実に登記され活動している
会社との間のギャップから様々な問題が生
じていることに起因している。すなわち、
法律は大規模会社を想定しているのに対し
て、わが国で百万社以上も存在している株
式会社の大多数は閉鎖的な中小会社なので
ある。そして、その中小会社では、たとえ
ば公告を怠る、監査役監査を形骸化させる
など、法律の規定が遵守されない現実が生
じてしまっている。

どうしてこのようなことになってしまっ

たのか。わが国の株式会社は、他国のそれ
と根本的な相違点をもっているのか。そも
そも株式会社とはどういうものなのか。こ
ういった「素朴な」疑問に対しても、本書
はいくつかのヒントを与えてくれる。（一
例を挙げれば、アメリカの株式会社には不
利性も存在しているのに対し、わが国のそ
れには有利性がかりが目立つ。これなら戦
後いわゆる「法人成り」が続出したのもう
なずけようというもの。）

さて、本書は「株式会社の基礎理論」に
ついて論じた第一部と「株式会社の財務理
論」について論じた第二部から成ってい
る。

第一部では、株式会社が今日の経済社会
において支配的な企業形態となった要因を
形態論と本質論から検討し、株式会社の基
本の特徴が資本の証券化による資本集中す
なわち証券金融にあるとされる。そのうえ
で、英米における株式会社の生成発展をた
どり、さらに、株式会社をめぐることまで
の議論の主要なものとして、パリーミ
ンズ、バーリ、ポーターの株式会社論にそ
れぞれ一章ずつがあげられている。

第二部では、まず企業を個別資本の運動と把握したうえで、株式会社の経済構造を概観される。そして、資本集中の手段である株式と社債の実体を見るときに、アメリカ株式財務論の確立に貢献したデュイングの主張を検討した後に、アメリカとわが国の証券金融が比較され論じられている。それを受けて、最終章においては、わが国特有の間接金融優位の財務構造を積極的に評価して締め括られている。

本書を二部構成にしたことについて、著者は「まえがき」の中でそれぞれが中途半端に終わってしまったのではないかと危惧されている。が、しかし、とくに著者のように株式会社を「資本集中と支配集中の機構」ととらえて論ずる場合には、本書でとられたアプローチは必須であろう。なお、本書は教科書に使うことを意図して書かれたとのことであるが、面白いことで定評のある著者の講義を聴く学生諸君だけでなく、一般の読者にも、株式会社を前述の二面から理解させてくれる好著といえよう。

百合野正博（天学商学部助教授）

山本 明著

『戦後風俗史』

（大阪書籍・発行 一九八六年十一月）
（四六版・二七八頁 一、四〇〇円）

自分史的なものを通史として残しておくたいと言う著者の思いが一つの実を結んだ。それが本書である。「時代とともに生々流転するものを、ときどきストップモーションをかけて、しげしげと眺めたい」と欲するのは、ひとり著者のみの思いではなく、誰しもそれぞれの歴史を持っていて、時に同様の思いにかられるのだけれど、世相と結びついたり、通史とするとところまでには至らない。

著者は、「私がもの心のついた時は、もう日中戦争がはじまっていた」という自身史を軸にして、日常感覚といういわば目の高さで見ることのできる戦中・戦後の風俗を、豊富な資料によって裏付けながら重ね合わせて、生き生きと描いている。年月の流れのなかで歴史的事実としてのみ記されている出来事が読み進むうちに情景となつてふくらんで来るのは、同時代を生きたか
らなのだろうか。

神戸で、南京陥落の提灯行列を見たという最初の社会的記憶から始まり、縁故疎開地のT町で過した小・中学校時代の服装のこと、田河水泡の「のらくろ」によって植えつけられた中国兵のイメージ、その頃手にした絵本や雑誌、B25の来襲によって「大東亜戦争」を身近な現実として認識したと、「勝ち抜く僕ら少国民」の歌詞とメロディー、そして戦争に敗けて「平和になった」といわれながらも「平和な日常という状況が理解できなかった」という少年時代、疎開先で見たアメリカ兵とジープや町の人々の対応と敗戦直後の文化や、修学旅行で共学になった女生徒とボートに乗り、

オールをこぎながら戦争が終ったことを実感した話、性のイメージと映画やカストリ雑誌のこと、京都での学生運動に参加した頃の青年の風俗、そして教師として味わった「大学紛争」のことなど、書きだせばきりのない程、著者の体験とそれを取りまく風俗をとおして、庶民の生きた五十年の歴史が、鮮やかに浮き彫りされている。

本文に加えて、これまでに書かれたエッセイが補論として置かれているが、その一

つ一つに時代の風俗がうっし出されていて、面白いと同時に現代に生きる私たちに、ある意味での問いかけをしているようでもある。

著者の飾り気のない筆の運びにのせられて自分史を書き始める読者ができるかも知れない。

河崎 洋子（大学宗教主事）

木村俊夫・金関寿夫・斎藤勇編

『文学とことば——イギリス

とアメリカ——上野直蔵先

生追悼論文集』

（南雲堂・発行一九八六年十月
A5版・六〇六頁・八、五〇〇円）

本書はその副題が示す通り前同志社総長故上野直蔵先生を追悼する意をこめて編まれたものであり、「まえがき」のことばを借りるならば、「先生に親しく教えをうけ、先生を追慕する者たちによる論文集」である。

昭和四年に同志社大学文学部英文学科をご卒業になり、その半年後に同志社専門学校英語師範部講師としてはじめて教壇に立たれてから昭和五十九年十月にお亡くなり

になるまでの五十五年間に、先生からさまざまな形で教えをうけた者の数はどれほどになるであろうか。本書に収録されている論文の執筆者は同志社大学をはじめ諸大学の教壇に立つ研究者であるが、上野先生から教えをうけ、さまざまな分野で活躍している極めて多くの人たちの協力があってこそ、本書は生まれることができたのである。

本書が収録する論文は四十五篇で、その分野は多岐にわたっている。大雑把にわけてみると、まず上野先生ご自身の専門分野でもあった中世イギリス文学に関する四篇の論文にはじまって、ルネサンス期から二十世紀にいたるイギリス文学関係の論文が二十二篇、十七世紀から二十世紀にいたるアメリカ文学を扱った論文が九篇、言語学、英語学、英語教育関係の論文が十一篇、そのほかキリスト教解禁前の和訳聖書についての論文、北アイルランド紛争についての論文、文学研究の方法論に関するもの、各一篇である。「あとがき」の筆者は、この論文集は「体系的に分野を設定したのではない」とことわっているが、収録されて

いる論文の分野の幅のひろさこそ、上野先生の学恩がいかに幅ひろく及んでいるかを如実に物語っていると思う。

第二次大戦中、同志社における英米文学研究の学統はさまざまな圧迫のもとにあって息もたえだえの状態であったと聞いている。そして、そのような状態のなかで上野先生はその学統を死守すべく懸命の努力を続けられたということも聞いている。この論文集はそのようにして守られた学統から生まれた見事な成果であり、天に在る上野直蔵先生の御霊への何よりの捧げものであると思う。

高山 修（女子大学教授）

島尾永康編著

『科学の現代史——一八五〇年から一九五〇年まで』

（創元社・発行一九八六年四月
B6版・二一六頁・一、三〇〇円）

よく知られているように、同時代史を書くことは必ずしも容易なことではない。このことは、自然科学の場合に、とりわけよくあてはまるように思える。科学史関係の今だに色褪せない「同時代史書」として

は、十八世紀後半に書かれたJ・プリーストリーの電気学史、今世紀初めに書かれたJ・T・マーズの十九世紀のヨーロッパ思想史、等、数えるくらいしかない。今世紀に入ってからの、就中、第二次大戦後の科学の急速な進歩は、著者たちの定める下限の一九五〇年から三十五年たった時点で書かれたこの本を、「科学の現代史」という表題にそぐわないものになっているかの印象を我々に与える。この三十五年間は、この本から、同時代史を書くときにしばしばみられるあの緊張と不安を取り去り、自信と安定だけを残したように思える。その意味ではこの書は、十九世紀後半の科学が内容の半分以上を占めていることと相俟って、同時代史とは言えないかもしれない。

本書は、受験書や概説書によくみられるような、満遍なく何でも広く浅く出ている通史ではない。しかし全体を通じて教科書的色彩は窺える。これはテキストとして使用されることも予想して書かれたからである。要約に適した本ではないが、簡単に内容にふれておこう。第一、二章では生物学史を扱っている。第一章では、十九世紀

後半の科学者の大きな関心事であった進化論と細胞説を、第二章では、分子レベルに至る遺伝現象の解明の歴史を扱っており、後者は手際の良い解説となっている。第三章では、十九世紀初頭のドルトンから二十世紀の初めまでの化学的原子論の発展を辿っている。第四章では、十九世紀末から今世紀の第一・四半紀にかけての物理学における変革を、相対論と量子論を中心に論じており、導入部のやや問題のある記述からする予想に反して、本書では最もユニークな章となっている。第五章は、ハードウェアを中心としたコンピュータ小史である。第六節は、近代日本における科学の発展を、一層広い歴史的文脈のもとに、極めて要領よくまとめている。

四人の著者は、それぞれの個性を発揮して、内容と形式の両面で特徴のある記述をしている。ただ惜しむらくは、編者のまえがきの言と違って、全体として必ずしも最近の研究を十分にふまえて書かれてない点である。この点では第四章も例外ではないが、明らかにこの分野の研究者によるものであり、示唆的な指摘も少なくない。また

この本の意図は、編者による第六章に、最もよく果されているように思われる。

松尾幸幸（工学工学部助教）

香川孝三著

『インドの労使関係と法』

（成文堂・発行一九八六年九月
A5版・二六六頁 三、〇〇〇円）

わが国では、近代から現代にかけての欧米の法制度の継受を背景として、欧米各国の法制、法解釈学の比較法研究が盛んに行なわれ、その質、量ともに多彩をきわめるが、それに較べて、アジア各国の法制を対象とする研究は、いまだ充分とは言えない。労働法学の分野もその例外ではない。

このような状況において、著者はこれまでアジア法研究の必要性を力説され、インドの労働法制を対象として多くの研究論文を発表されてきた。著者のインド労働法研究は、その内容の精度の高さにおいて、学界ではかねてより定評があった。その既発表論文を中心として構成された本書は、アジア法研究として貴重な成果であるばかりでなく、きわめて充実した内容をもつ比較労働法研究の一集大成として、高い評価を得

ることになろう。

インドは、旧宗主国のイギリスの勞使關係法制を継受したが、例えば、不当勞働行為制度はアメリカ法の影響を受け、勞働協約法制はオーストラリアの法制度をモデルにしているという具合に、その法継受は複合的である。さらに、法継受はインド固有の特殊な政治的、經濟的、社会的諸条件と無關係に行なわれるものではない。そこに、諸外国と類似の法制を採用しながらも、独自の法理形成の可能性がある。著者は、イギリス法、アメリカ法、問題によっては日本における法的処理をも参照しつつ、インド独自の法理を析出している。その筆致は、綿密にして明快で、インド勞働法の現状を的確に伝えてくれる。本書において特に関心を引くのは、勞働法制、法理論が經濟發展という政策目標に強く規定されている点である。例えば、不当勞働行為制度には、産業平和を維持し、經濟發展の阻害要因を排除するという趣旨が強く現れており、勞働組合の承認制度には、組合を經濟發展に協力する存在として規制するという考え方がまた、ストライキをめぐる法

的問題の処理においては、經濟發展のための産業の効率の運営、産業平和の維持という観点みられるのである。このような法政策的な視点は、わが国の勞働法制、法理論の認識にとつて興味深いものを含んでいる。

本書が、著者の意図する、アジア法への関心を高める「刺激剤」（はしがき）たりえていることは疑いない。また、欧米の勞働法制、法理論と異なるインドのそれは、われわれに多くの有益な示唆を与えてくれる。とくに勞働法の分野に限らず、およそ比較法の研究を志す者にとつて、本書の刊行のもつ意味はきわめて大きいといえよう。

唐 津 博（女子大学嘱託講師）

井ヶ田良治著

『法を見るクリオの目——歴史と現代——』

（法律文化社・発行一九八七年一月）
B六版・一六一頁 一、三〇〇円

著者は「近世村落の身分構造」（國書刊行会、一九八四年）などのすぐれた研究ですでに学界で高い評価を得ている法制史学

者。本書の副題は「歴史と現代」。表題の「クリオ」とは歴史の女神の名である。

本書は、著者が過去二〇年程の間に発表してきた小論やエッセイ一二編を集めたものであり、いずれもきわめて明快でわかりやすい論文である。第一部「西と東のあいだ」には、「法の歴史に学ぶ」、「法の比較史」、「イギリスにおける王治政年と西暦」、「ヴォルテールの『哲学書簡』が引用したマグナ・カルタについて」、「『戸籍』の比較史」などが収められている。「法の歴史に学ぶ」では、法制史の面白さが説かれているだけでなく、歴史が「權威を正当化しただけでなく、歴史が「權威を正当化したり、体制側の道徳を是認するために使用されてはいけない」ことが、法学者の社会的責任と合わせてさりげなく触れられている。また「法の比較史」では、わが国の法史をもつぱら明治以後の近代法典主義の眼鏡を通して考察してきたこれまでの研究方法を反省し、平安時代以降の法史を法曹法史としてみなおすことが提案されている。判例法主義のイングラント法史を比較の対象として日本の法史をみなおすという考えは、著者独自のものであり、著者の今後の

研究の方向を示唆したものである。

第一部と違って、第二部「日本のなかで」では、もっぱらわが国の問題を扱った論文が収められている。つまり近世の近畿村落の身分構造や変遷を扱った「江戸時代の村」、「憲法おしつけられ」論を批判的に検討した「平和憲法の誕生」、一九七〇年の東京地裁杉木判決を素材にしながら、文部省の歴史観や「実証主義」の歴史方法論を批判した「教科書検定訴訟判決」に思いつである。また巻末には、「現代を憂う」と

『池袋清風日記——明治十七年——』

編集・発行同志社史資料室

明治十八年六月に、同志社英学校邦語神学科を卒業し、同志社女学校教員、同志社図書館司書をつとめた池袋清風が、日々の出来事を克明に記録した明治十七年の日記全文が、このほど翻刻・刊行された。

清風のこの日記の原本は、大正十三年に清風の遺族から同志社へ寄贈されたもので、松浦政泰著『同志社ローマンス』のほか、『同志社五十年史』、『同志社百年史』

して日の丸の歴史や国家機密法案などに関する三編の小論も収められている。

本書は法制史の入門書として読むことができる。またわが国の現代の政治状況に対する一人の法制史学者の警鐘としても読むこともできるであろう。著者は、法制史は、「法にかかわる人々を誤った法の『過去』から解放し、正しい法の『歴史』を明らかにすることによって、法の未来のためにつくすことができる」としている。著者の確信であろう。イギリスの古文書からわ

などの編纂の際に一等資料として活用されてきたが、全文の翻刻ははじめてである。

学生生徒の修学・伝道をはじめ寮生活、教員（外国人教員を含む）の動静などが、これほど克明に記録されている例は、目下のところ同志社には他にない。空前絶後のリバイバルの様相（三月）、新島襄校長の二度目の外遊への旅立ち（四月）、徴兵令改正にともなう学内の動揺（二月～三月）、卒業式（六月）、彰栄館の建設（七月～九月）、キリスト教演説会とその妨害、その他、重要な記録が少なくない。

が国の古い史料まで自由に読みこなす著者のすぐれた語学力には敬服するほかないが、本書は、そのような語学力だけでなく、著者の深い学問的蓄積や、学者としての誠実な生きかたも十分に伝えている。なお表紙カヴァーの表は一六世紀のイギリスの封讓渡状、裏は丹波国桑田郡日置村の村座掟書の円型署名。細部にも著者のこまやかな配慮がみられる好著である。一読をお勧めしたい。

深田三徳（大学法学部教授）

清風に在学中から桂園派の歌人として知られており、寮の彼の居室での和歌指導の模様や、歌人との交友の記録は、近代文学史の資料としても価値をもつものである。この明治十七年に清風から和歌の指導を受けている寮生には、大西祝、安部磯雄、湯浅吉郎、三輪礼太郎、滝能武太らがいる。文人の筆になるだけに、記録の固苦しさは余り感じられない。

上・下各一〇〇〇円
取扱い・同志社収益事業課
（電〇七五―二五一―三〇三七）まで